

新聞を使った NIE の授業実践と学生の情報読取能力

西尾圭一郎（教育ガバナンス講座）

土屋武志（社会科教育講座）

梅田恭子（情報教育講座）

岩下理花（中日新聞社）

Keiichiro NISHIO (Department of Educational Administration and Governance)

Takeshi TSUCHIYA (Department of Social Studies)

Kyoko UMEDA (Department of Information Sciences)

Rika IWASHITA (The Chunichi Shimbun)

要約

近年、わが国でも NIE の取り組みが盛んになってきている。本学では、基礎教養科目として、新聞を通じたメディア・リテラシーという授業を、中日新聞との連携事業の一環として実施している。しかし、一口に NIE といっても様々なアプローチがありうる。そこで本学において 3 つの方法で実施した NIE について整理し、それぞれの実践とその効果について整理を行う。また、新聞を用いることによって、読解力等の能力向上にとどまらず、読解力とは異なる、内容に関する教育にも効果がある可能性が指摘されている。そこで現代的課題である SDGs をテーマとした教育として、SDGs に関する記者の講義や基礎知識に関する講義を受けたうえで、SDGs に関連し自身が興味を持った記事を要約するという形での学習を実践し、その実践結果を整理した。その経験は、調査方法の問題から明言はできないものの、今後の SDGs 教育をしていくうえで一つの現状を浮き彫りにした。

keywords : NIE、新聞、情報リテラシー

1 はじめに

本稿は愛知教育大学の教養科目群基礎教養科目のうち、課題探求科目に位置づけられている「市民リテラシー（新聞から学ぶメディア・リテラシー）」（以下、本授業）の実践報告である。新聞を活用した教育、すなわち NIE の実践である。NIE は「民主主義を支え、よりよい市民を作る」効果があると考えられ「世界 80 か国以上で実施され」ている¹。そして新聞を授業で用いることによって子どもたちの「読解力」の低下や文字・活字離れが心配されるなかで、成果をあげている。また、NIE は読解力の向上にとどまらず、授業のツールとして使うことで、より深い理解をもたらさうる可能性を持つ。今回の研究対象期間に行った授業では、新聞を用いることでメディア・リテラシーを中心課題とする授業の中で、情報以外の分野に興味を持つきっかけ作りも意識した。また、今後の授業の改善のために、新聞をつかった大学生の情報リテラシーについても調査を行った。

以下では本授業の概要を概観したうえで、その狙いと取り組みを説明し、授業からわかった学生の情報リテラシーについても報告を行う。その上で、今後の課題を提示する。

2 授業の概要

本実践の目的は、NIE を用いた授業におけるその効

果について受講者自身に目に見える形で体感してもらうことである。それは研究としては、NIE の効果を質的と量的の 2 つの面から測ることもつながる。とりわけ新聞を使うことで自身の情報処理能力について、自らの効果を自覚すると同時に専門家とに違いを明確に体感してもらうことを目的とし、その現状を整理することが本論文の一つの目的となっている。

本授業の受講者は初年次の学生を中心としており、2020 年度後期に実施した本授業は、受講者数が 19 名と比較的小規模であったが、それゆえに新型コロナウイルス感染症が拡大していた状況下において、限定的ではあっても対面授業を実施することができた。

授業の狙いとしては、現代的課題への対応能力、社会課題に取り組もうとする意欲、批判的思考力を養うことである。そして現代的課題への対応を養うために、現在の世界的な重要テーマとなっている SDGs を題材として取り上げた。SDGs は現代的課題であるため新聞においても意識されており、NIE において取り扱うのに適した課題でもあったため、とりあげた。また新聞記者の講義を受講し、リフレクションペーパーを使った質疑を行ったり、自ら新聞を活用して情報の収集、整理、発信を行ったり、といった活動を通じて情報活用能力やコミュニケーション能力の向上を目指すものである。そのため、授業全体を通じて新聞を題材として社会に関わる情報を収集・分析・活用する。

また本授業は愛知教育大学と中日新聞社との連携を受けた寄付講座であるため、実際に記事を作っている記者と直接対話する機会を得ることができ、通常のNIEよりも更に実践的だという特徴を持っている。

表1 本授業のカリキュラム

回	授業内容	対面・遠隔
1	ガイダンス：授業目標の整理	対面
2	メディア・リテラシー：掲載記事の具体例から（中日新聞）	対面
3	新聞というメディアの特性（中日新聞）	対面
4	中日新聞記者による講義「SDGs 関連、環境等」	対面
5	中日新聞記者による講義「呼吸器事件の調査報道」	対面
6	新聞を使った情報収集能力の自己認識：課題の説明	対面
7	新聞を用いた情報処理能力の把握作業：課題実施①	遠隔
8	新聞を用いた情報処理能力の把握作業：課題実施②	遠隔
9	新聞を用いた情報処理能力の把握作業：課題実施③	遠隔
10	新聞を用いた情報処理能力の把握作業：課題実施と結果提出④	遠隔
11	新聞を活用した情報発信：自分自身の興味関心の確認、情報の収集、整理、発信の方法論	対面
12	口頭発表①資料提出①	対面遠隔
13	口頭発表②資料提出②	対面遠隔
14	講評	対面遠隔
15	まとめ：最終課題作成	遠隔

出所：著者作成。

上記のような本授業であるが、その内容は表1にあるように全15回で構成され、対面授業と遠隔授業が混在する授業である。そして授業は大きく3つのフェイズに分けており、第1フェイズは第1～5回、第2フェイズは第6～10回、第3フェイズは第11回～15回である。各フェイズの狙い等は次節で簡単に触れる。

ただし、2021年1月以降、新型コロナウイルス感染症拡大が再び懸念されるようになり、対面で実施する予定であった第12回以降が全てオンデマンド型の課題作成、提出回となってしまい、対面でのフィードバックができなかった。

3 各フェイズの狙いと取り組みの特徴

前節で述べたように、本授業は5回を1セットとし

た3つのフェイズに分かれている。それぞれのフェイズごとに狙いがあり、細かく区切って学習を行った。

第1～5回の授業となる第1フェイズは中日新聞社員から講義を受け、新聞というメディアの特性と情報処理（情報収集、情報整理、情報発信）の方法を学ぶものである。ここでは新聞を使ってメディア・リテラシーを学ぶにあたって基礎的な情報となる、情報媒体としての新聞の特性であったり、それらが作られていく過程でどのような狙いを持ち、どのような工夫がされているのか、といったことを学ぶ。メディアを使って情報を取り扱うにあたっての、ファーストステップである。これについては、学習の入り口であると同時に、新聞記者など普段は関わりを持ってないプロフェSSIONALの話聞くことで、学習のモチベーションを高めることも狙いとしている。

第6～10回の授業となる第2フェイズでは、新聞を使い自分自身の情報収集能力の現状を認識してもらうことを目的とした。具体的には「学生一人一人に5日分の新聞を配布する。配布した5日間の新聞を読み、そこに掲載された記事のうち、SDGsに関連すると思う記事を選び、赤の水性ペン（配布したもの）で記事を囲ってもらおう。そしてそれぞれの日ごと、各面ごとに該当する記事があったと思った数を報告してもらおう」という課題を提示した。

学生には二つの狙いがあることを事前に伝えた。一つには、受講者の情報処理能力の確認と自己認識を狙いとしている、という事である。学生の判断した記事数については、フェイズ終了後に取り纏め、匿名化したうえで全体に開示した。それにより受講者間での情報の認識にどの程度違いがあるか、自分自身はどういった認識を持っているか、といったことを相対化し、自己の情報処理能力について考えてもらおう、という形を取った。

そして学生に課題を説明する際、ベンチマークとして中日新聞の社員にも同じ事をしてもらうことを伝えた。そのことにより、学生間の情報処理能力の比較にとどまらず、プロとの比較も行えるようになる。こうして自己の情報処理能力についての客観視ができ、読解力や情報処理能力の重要性に気づくと考えた。

もう一つは、この取り組みを通じて副次的効果として、SDGsとよばれる世界共通の社会課題への関心の向上、知識の習得を目指している、ということである。NIEの先行実践では、新聞を活用することによって学生（生徒）が読解力を向上させたりすることにとどまらず、他の分野の内容を学ぶことができたということが報告されている²。そこで本授業においても、NIEと並行してSDGsという現代的課題へのアプローチができれば、という狙いをもってカリキュラムを構築した。具体的には第4回目の授業での新聞記者の講義を基礎に置き、

第6回目の授業でSDGsに関する基礎知識を講義したうえで、自身がSDGsに関連すると考える新聞記事を抽出するという課題を通じて能動的にSDGsにアプローチしていく学習を行った。

第11～15回の授業となる第3フェイズでは、教員が配布する新聞の中から、最も興味を持った記事を選出してもらい、その記事を基にしつつ追加の資料を探し、そのテーマに関してのレジュメを作成したうえで、その社会現象について他の受講者の前で紹介をもらおう、という授業を行った。このフェイズでは新聞記事を使った調査・発表（＝情報収集、整理、発信）を主体的に行うことで、本授業の総仕上げとしてのリテラシーの向上を企図していた。ただし、前節最後で述べた通り、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、対面での情報発信の授業が実施できず、レジュメの作成とその講評という事にとどまってしまった。対面授業によって学生の情報発信能力を把握するという目的は達することができなかった。しかし、レジュメ作成によって、学生の調査能力、情報整理能力、メディア・リテラシーについてはある程度は向上させることができたと考える。

4 授業の成果

本授業の取り組みの成果として、質的な成果と量的な情報把握の2点を挙げることができる。

質的な成果としては、学生の気づきを中心とする学習の成果である。それは第1フェイズと第3フェイズで確認できる。第1フェイズに関しては授業終了後の学生の評価コメントでは、「新聞の情報が全てだということやネットでの情報収集が全くいけないということではなく、気になった記事を他媒体で掘り下げることが必要で、メディアを上手に使い分け、情報のアンテナの感度を高めることが大切であると感じた」、「多面的な視点から検討し判断できる力が必要なのだと感じた」というように多角的なものの方への気づきや、「教員として未来を担う子どもに伝える際にしっかり話せるようもっと勉強しようと思いました」というような他者への情報発信への意欲を示す意見が見られた。また、「今までSDGsを名前と持続可能な開発目標の略であることしか知りませんでした。しかし、本講義でSDGsがどういうものなのか、さらにそれがなぜ必要になるのかを詳しく学ぶことができました」などのように、SDGsについても学習する機会を持てたことで関心が高まったというコメントも複数あったため、前節で指摘したようなNIEによる講義によって、副次的な効果が観察された。

第3フェイズでは、新聞をきっかけとして一つのテーマについて深掘りをし、他人に発信するという作業を通じて、知見の広がりを感じるコメントが見られた。

例えば、「大雪に関しての問題という、異常気象が取り上げられがちであるが、少子高齢化が新たな問題を引き起こしていると分かった」といったこれまで気づかなかった視角の認識や、「テレワークを推奨している現在もなお、あまり、テレワークが浸透していないことがよく分かった」などのように、通説とされることについての裏付け作業を経験したことなどがコメントから見られた。

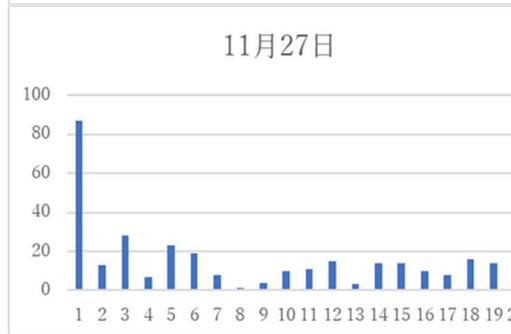
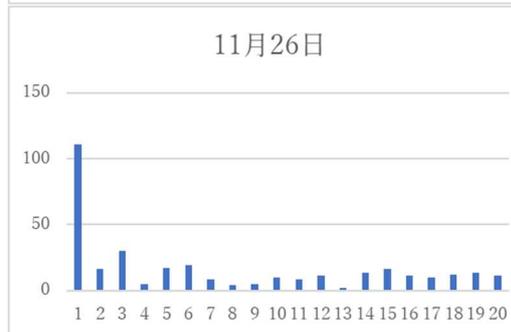
また、心理的な充実度も高く、全体を通じた授業の感想として「自分のリフレクションペーパーを中日新聞の方に添削して頂けたのはとても光栄で、今後の参考にしていきたい」「新聞づくりに携わっている方々のお話を直接お聞きすることができ、非常に勉強になりました」「学びのモチベーションも保てました」「自分が伝えたい情報を発信することや「SDGsに関する関心」が高まったというコメントがあり、中日新聞社の記者と直接かかわれたことによる充実感や達成感を感じるコメントが複数見られ、専門家を交えた実践的授業の効果の高さを感じることができた。充実度については、授業改善のためのアンケート調査においても「授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照したうえで、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した」という項目では「強くそう思う」が63%、「ややそう思う」が38%と肯定的に捉えられていた。また「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した」という項目でも「強くそう思う」が63%、「ややそう思う」が25%、「どちらともいえない」が13%と過半数が肯定的意見であった。もちろん、そもそもの回答数が少ない（21人中8人）という事や、こういったアンケートに対しては厳しい意見は出しにくいというバイアスもあるだろうが、概ね肯定的に捉えられたと考えられるだろう。

量的な成果としては、第2フェイズで実施したSDGsに関連すると思う記事を選出するという課題を通じて、学生のメディア・リテラシーを測定したことである。この課題からは、学生の情報認識能力のばらつき度合い（同じテーマを与えられた上で同じ新聞を見たとしても、その記事を異なるテーマのものとして認識をすること、そしてプロ（中日新聞社員）と比較して、どの程度の差が出るか、という事が明らかになった。特にプロとの差が明確に出た理由として、新聞社員が一つの記事がどういう背景を持ち、どのように社会にかかわるのか、という事を連想できるのに対し、学生は記事そのものの単語や直接的に事象の認識にとどまり、深い読み取りが十分にできていないという事が考えられる。このことは、今後NIEを実践した際に、学生にどの程度の効果が期待できるか、ある

いは現状、学生は新聞をどの程度読み込んでいるか、という事が明らかになる。特に後者は重要で、新聞を授業で使った際に、教員側が「このくらいわかっているだろう」と思っていることと、受講者側が「実際にわかる」ことの間、大きな違いがあった場合、教育効果は著しく損なわれてしまう、あるいは期待したものと違う効果が生じる（それが良い効果であれ悪い効果であれ）可能性を持つ。したがって、新聞やそれ以外の読み物を授業で用いた際には、深い学習を実現しようとするならば文の読み解き、連想の重要性などについての事前の指導や意識付けをすることが効果を持つ可能性を指摘できる。

授業の実施結果については、下記の図1に示すとおりである。授業では2020年11月23日～27日の5日分の新聞を渡し、SDGsに関連すると考えられる記事を抜き出してもらい、その数を申告してもらった³。それらを匿名化して数のみを積み上げたものが図1である。この図1における「1」のサンプルがプロ（中日新聞社員）によるものである。この図を見ると、学生間のばらつきも大きいことがわかるが、プロとの差の大きさには驚かされる。学生については、11月26日であれば学生の最大記事選出数は30、最小記事選出数は2と最大28の開きがあった。それ以外でもすべての日で20程度の開きがあった。しかし、プロとの差は大きく、最も差が開いたのは11月25日で、プロが117であるのに対し、学生のうち最も多く選出したものでも29と、4倍以上の開きがあったのである。

図1 11月23日～27日の5日間の調査データ



注：縦軸が選出した記事数、横軸は中日新聞社員と各学生を匿名化のため番号化したもの（1が中日新聞社員、2以下が学生）

出所：著者作成。

5 おわりに：残された課題

NIEの重要性が指摘されるようになってからかなりの時間が経つ。しかし、改めて授業を整理してみると、外部のプロフェッショナル（新聞社の社員）と関わることによって、「今まで知らなかったことを知ることができた」だけでなく「記事がどういう風に作成され、どの手順を踏んで新聞に載るのかを知る」ことで納得できたというように、学生のモチベーションも向上し、理解できたという手ごたえが高まっていることがわかった。また講義や活動を経て、「MDGsがSDGsに変わったわけなど、自分たちにとって、『関係なくない』ことばかりであること、その関係なくないことに対して自発的に行動を起こすことの不可欠性を学ぶことが出来たと思う」といったコメントも見られ、他の分野の内容を絡めることによって、副次的な教育効果も得られる事が観察できた。また、授業を3つのフェイズに分けるという試みをしたが、このことで

NIE の実践方法にも様々な手法があることが改めて確認できたともいえよう。

また、学生の新聞記事の読み取り能力について数量的に把握することができたが、その結果からは、我々教員サイドが受講者の読解力やメディアを読み解く力を改めて認識したうえで、再度授業の構築を試みる必要性があるのかもしれないと感じさせられた。

ただし、この数量的なリテラシーの把握については、注意点がある。SDGs というテーマに関連する記事を選出する、という課題であったことから、プロとの比較で大きな差がついたことについては、記事に対する読解力が要因なのか、SDGs というテーマに関する知識が要因なのか、あるいは新聞記事という構成や形態に対する理解が要因なのか、現状では複数の要因が指摘しうる。

これは調査をメインとした取り組みではなく、授業の一環としての結果の整理であるためである。そのため、あくまでも参考程度の情報が入手できた、という理解をすれば、今後の課題が見つかったという事ができ、より効果的な授業の構築に向けた研究への足掛かりとすることができよう。具体的な提言を一つ挙げておこう。例えば新聞記事を使って学習へのきっかけを作ろうとしても、それがうまくいかない場合もあり得る。その要因として、授業づくりの問題があるかもし

れないが、今回のデータからは受講者側の情報処理がうまくいっていない可能性があることがわかった。すなわち授業の改善だけではなく、授業で使う新聞等の情報や資料を読み解けないという事をどう防ぎ、より良い理解をもたらすか、そこを考えることでより良い教育へとつながるのではないだろうか。その意味で取り組むべき課題を示すことができたと考える。

参考文献

榎引素夫「地理と学校と新聞：NIE の持つ可能性」『季刊地理学』第 54 巻第 4 号、東北地理学会、2002 年、251-254 頁。

鶴田輝樹「歴史的な見方・考え方を育成する NIE 実践：歴史を大観するための壁新聞づくりを中心として」『中等教育研究紀要』第 66 号、広島大学附属中・高等学校、2020 年、21-28 頁。

松井恵三・今井慶宗「短期大学における教育課程での新聞を用いた社会福祉教育の効果の一考察」『中国学園紀要』第 16 号、中国学園大学/中国短期大学、2017 年、31-39 頁。

※本稿は愛知教育大学の学長裁量経費「教職実践力向上重点研究費」による研究成果の一環である。記して謝意を表したい。

¹ NIE 教育に新聞を「NIE とは」(<https://nie.jp/about/>)。

² 例えば榎引 (2002)、松井・今井 (2017)、鶴田 (2020) など、新聞をツールとして他の分野の教育効果を高めることに関する研究は多々見られる。

³ その際作業に使った新聞自体も提出してもらった。自己申告とのずれ等については、作業に使った新聞とデータとを照らし合わせて、エラーは修正している。